

都市機能の防護に関する大型研究 の3カ年を終えるに際して

所長 武藤 義一

私たちは昭和46年度から都市における災害公害の防除と、都市機能の防護に関する大型プロジェクト研究を企画し、3カ年ずつ2度にわたって第一次臨時事業と第二次臨時事業として実施し、今年の3月に第二次臨時事業を終了した。ここで3カ年にわたった第二次大型研究をしめくくるために全体の研究の概要を紹介することになったので、改めてその成果を顧みることにした。

さらに、この特集号の印刷製本の最中に所長としての任期が満了することになっているので、併せて3カ年にわたる所長在任中のことがらも回顧させていただき、もって退任のご挨拶にかえたいと思うのである。

第一次臨時事業は都市における災害と公害の防除に関する研究であって、簡単に言うならば都市の地震対策、交通対策、および廃棄物対策の3グループにわかれて実施された。第二次の大型研究はこれに続いて都市環境の汚染計測と防除、都市情報の総合的収集と処理、および都市災害公害の最適防護システムの3グループより成る臨時事業で、災害公害からの都市機能の防護とその最適化に関する研究を総合的行なったものである。

大都市に生活している者にとって、もし万一にも非常災害が発生したとしたならば、どうしたらよいかという不安の念が常につきまわっていることと思う。これに対して国や地方自治体が、それぞれの立場で対策を検討して、必要な処置をとりつつあることはすでにご承知のとおりであって、本所の教官も多数の方が要請に応じて各種の委員会などに参加し、主導的役割を果たしている方も多いのである。

しかし、これとは別に私たちは自らの意志で敢て都市災害の問題に取り組むこととして、多額の国費を受けて大型プロジェクト研究を実施した。6年前にこの大型プロジェクトを開始するまでには、いろいろの意見が寄せられたのであって、刻下の急務であるから衆知を集めて大いにやったらよい、という賛成派から、大学の教官に都市問題などできるわけがない、という反対派まで種々あったし、もちろん所内にも賛否両論があって、大いに議論をたかかわしたのであったが、遂に実施にふみ切ったものであった。

その理由としてはいくつかの条件があげられるが、まず第一には都市災害とくに耐震構造関係にかなり研究の成果の積み重ねがあったこと、第二に情報処理関係、システム工学関係および環境問題関係にそれぞれすぐれた研究者が所内にいること、第三に当研究所は設立以来の経過もあって異なった専門分野の間の協同研究が比較的やり易く、かつうまく行なった実績のあること、第四にこのプロジェクトを企画するときに、すぐれたプロジェクトリーダーとプロジェクトプランナーに恵まれていた、ということである。

この大型プロジェクトの企画は、平尾名誉教授をリーダー、川井教授をプランナーとして理念を確立し、実施は斉藤教授（前半）と田中教授（後半）をリーダーとして行なわれ、全般的な責任は所長が自らあたるという組織で、前所長（鈴木名誉教授）は実際に第一線で陣頭指揮をされた感が深く、この点は私は十分に責任を果たさなかったことを後悔している次第である。さらに、このプロジェクトには全所の教官のほぼ以上が参加して行なわれたのであったが、直接にこの研究に参加されない教官とのバランスをとったり、所の他への影響を常に把握しておくためのチェック機関としての委員会も設置して運営の万全を期したのであった。

第二次まで含めて6年間の成果は、一見はではないが、国や自治体が大きい処置をとろうとするとき、いつも言われることは基礎となる学問的裏づけが望ましいということであった。その要望に応えることができたものと確信しているし、現にそのようなコンタクトがそれぞれの研究者に外部からなされつつある状況である。

さきに大型プロジェクトを可能にした4条件を述べたが、当研究所の特長は内容こそ違ってもそれぞれの分野においてこの4条件が満たされているものと思う。私自身は何ひとつできなかったけれども、この4条件のおかげで大過なく任務を果たすことができたと思ひ、各位に深く感謝する次第である。